2002 年度 修了

摂食障害における対象恒常性の研究

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター

筆者が経験した摂食障害の 3 事例をもとに、その病理と治療、回復過程について、精神力動的、とりわけ対象恒常性の獲得、形成能力、維持という観点より考察することとした。
事例１については、幼少期からの‘母親的なもの’という対象の不在から、対象恒常性の獲得がなされていなかったものであると考えられた。安心して母親対象を取り込めずにいたＡは、自己の感情や感覚を抑圧する行動様式を身に付け、現実世界における対人関係においてもストレスを感じていた。不安発作よりのリストカット、抑うつ状態、過呼吸発作などの症状となって現れた症状は、いわゆる自己、そして対象の分割といった対象関係論で言うところの分裂ポジションのなせるものではなく、対象恒常性の獲得不全が、自己不全感に繋がったもので、「やせ願望」に基づく過食嘔吐もまた、漠然とした不安感の緩和のための自己救済手段であったと考えられる。治療過程においては、治療者が、Ａにとっての主要対象となる立場となってコンテインしてゆくことにより、母親的役割を担い、その後、その機能を母親へと戻していった。その中で、Ａの内界において対象恒常性が獲得され、症状の消失と、対人関係の改善、対社会的活動の広がりへと発展した。
事例２では、アルコール依存症の父と病弱な母といった、機能不全といわれる家庭に育った、いわゆるアダルトチルドレン（ＡＣ）としてのパーソナリティ構造と行動様式が、対象恒常性の獲得能力を培い得なかった要因となっていた。ＡＣとしての役割行動に埋没する生い立ちの中で、根強く残った分割された対象関係とそれに対応した自己像の分割は、自己不全感を生み出し、自己の個性や自立感を得るために、体重・体型へのコントロールにとらわれ、また、投影、退行、知性化などの原始的防衛機制を使用するに至った。
治療過程において、治療者は、父への悪いものの投影、母への退行から、自己の分割について洞察の機会を与える自我機能的役割を果たし、結果的には、父の回復、母のコンテインなどにより、部分対象、部分自己の統合を促したと見ることができる。
事例３については、元来あった母親との分離個体化不全が、現実の母親の死という形で露呈したものである。その結果、通常見られる正常な悲哀の作業が行われず、遷延した喪の作業として、過食嘔吐が出現したものであった。過食期と拒食期を繰り返すこの事例では、拒食期は母親への感情を隔離するという防衛機制が働いているとみることができ、過食期については、母親との共生的融合を求めた過食、分離の試みとしての嘔吐との象徴解釈も可能であるが、やはり、Ｃの「やせへの希求」は、自己不全感を埋めるためのものであった。拒食、過食嘔吐は、根底に存在していた分離不安、喪失受容への防衛機制であったと捉えることができる。
治療としては、母親への感情を隔離せず、身を持って感じ、整理することを目標に、「母親ノート」の導入とともに、「折鶴」の作業を課した。この「折鶴」は、現実にはもう存在しない母親からの心的分離作業の助けとなる移行対象の機能を果たしたといえるだろう。その後、時間はかかりながらも、過食嘔吐の症状は減少し、対人関係にも広がりがうまれ、対社会的活動も行えるようになった。
これら３事例から、対象恒常性の獲得不全、獲得能力の不足、対象恒常性の維持の問題が、摂食障害病理の背景に存在している場合があることが考えられた。生後、３歳までの乳幼児期にそのおおまかな形が形成されるといわれる対象恒常性について、その形成、維持が人格の成熟を促すものであること、ストレス状況に対処する力となりうるものであることといった、その重要性が再認識された。
また、この研究を通して、対象恒常性は、一生涯にわたり、獲得・形成されうるものであり、ストレス状況において、その不全が露呈したようなときに、再獲得、再構築しうるものであることを認識することとなった。